子どもの目さし行動

—母親の注意を喚起する視線—

宮津寿美香

(日本女子大学学術研究院)

キーワード: 目さし 母親の注意 前言語期

Eye-pointing of infant

Sumika MIYATSU

(Research Fellow, Japan Women's Univ.)

Key Words: eye-pointing mother's attention preverbal vocal period

目 的

多くの前言語期のコミュニケーション行動の研究は、主に9か月以降を中心として取り上げられてきたが、乳児期初期でもすでに指さし行動に付随する、もしくは関係する非言語的コミュニケーション行動を示しているとの指摘がある。特に、子どもの視線に重点をおいたものが多い(瑞穂・武藤, 1997 など)。しかし、乳児期初期から縦断的に観察されたものはほとんどなく、子どもの視線が発達と共にどのように変化をするのかなど具体的な研究はない。また、視線は、指さし行動のように目に見えて把握しやすい行動とは異なり、子どもがなにをみているのか正確にとらえることは困難であろう。本研究では子どもの視線の中でも、母親がなんらかの反応を示したものの、つまり「母親の注意を喚起する視線」を「目さし」とし定義する。また、注意を喚起するという点では、指さし行動などの他の前言語期にみられる現象との関係をみていく必要があると考える。それらの行動の出現により、目さしに質的、量的な変化がみられるのか、乳児期初期から前言語期を縦断的に観察することで、目さしの発達の意味を探ることを目的とする。

方 法

研究対象: 20XX年11月25日生まれの健康な女児(以降乳児A)とその母親。Aは第一子であり、母親と父親と三人で暮らしている。観察開始に先立ち、母親には、観察における同意書に署名してもらった。

観察期間: 20XX+1年6月～20XX+3年2月までの乳児Aが生後7か月(216日)～2歳3か月(816日)まで、筆者が乳児A宅を訪問するかたちでおこなった。期間中、乳児Aの体調や機嫌などから、観察頻度は一定ではなかったものの、約30分の観察を合計36回(1080分間)おこなった。

観察方法: 母親には状況を特定せず、玩具等を用いて乳児と自由にやりとりをするように依頼し、デジタルビデオカメラで録画した。使用する玩具は、家庭における母子の自然観察場面ということを考え特に指定せず、その時の乳児Aと母親が親しんでいるものを用意してもらった。また、観察終了後に母親に乳児Aの言語面や生活面について、簡単に話をうかがった。

分析方法: 記録から、乳児Aの言語に関連する行動と主な母親の反応を抽出した。

〈乳児Aの言語に関連する行動〉

乳児Aの行動は、大きく、(1)「目さし」(母親の注意を喚起する視線)、(2)「指さし」、(3)「一語文」、(4)「二語文」の4つに分類した。

〈母親の反応〉

母親の反応は、(1)「見る」(2)「指さし」(3)「声かけ」の3つの項目に分け、分類をおこなった。なお、声かけをしながらか対象を見たものや、声かけをしながらか対象を指さしたものは、(3)「声かけ」に分類した。

〈時期の分類〉

乳児Aの行動特徴に合わせて、20XX+1年6月28日～10月4日までを「目さし期」(7日間)、10月25日～12月21日を「指さし期」(9日間)、20XX+2年1月31日～10月3日を「一語文期」(14日間)、11月7日～20XX+3年2月17日までを「二語文期」(6日間)とした。

結 果

「指さし時期」に入る前の「目さし期」では、日によって差はあるものの、どの観察回でも「目さし」がみられる。しかし、「指さし期」に入り、最初の観察である8回目では、目さしがみられるが、次の9～11回の観察では目さしが一旦なくなっており、12回目で再び目さしがみられている。目さしで、特に多くみられた「声かけ」について、その内容に対象の名詞が入っているものの割合を算出したところ、「指さし」と「目さし」はほぼ同一であった(目さし 60.0%、指さし 59.5%)。また、乳児Aの視線が母親の「声かけ」を引き起こすまでの平均時間を、「目さし期」、「指さし期」、「一語文期」の三期に分け(「二語文期」については該当なし)、分散分析をおこなったところ、時期の主効果は有意であり($F(2,86)=5.10$, $p=0.008$)、下位検定では、「目さし期」と「指さし期」、「一語文期」に有意差がみられ(それぞれ $p<.05$)、「指さし期」と「一語文期」の間には差がみられなかった。

考 察

母親の声かけにおいて「目さし」と「指さし」では、名詞が入っている割合に大きな違いがないことがわかった。このことから、子どもが有意義語を発するまでの「指さし期」までを「前言語期」とすると、指さしに対する母親の声かけの内容と、目さしの声かけの内容は同一の可能性もあるといえる。指さし行動と同等、もしくは似通ったコミュニケーション機能が付随していることが示唆された。また、発達と共に、母親の乳児Aの視線への反応時間がなくなり、目さしがおこりにくくなることがわかった。乳児期の母子相互作用場面の研究において常田(2007)は乳児の姿勢運動能力の発達によって、母親のかかわりは変化し、こうした変化が新しい相互交渉のパターンの出現を導いているとしている。視線によるコミュニケーションから、言語を用いたコミュニケーションへと移行することで、母親もその状況に見合った関わり方を自然におこなっているのであろう。

引用文献

- ・穂優・武藤安子(1997). 前言語期の「乳児・もの・人」の三者関係の形成過程. 日本家政学会誌, 48, 10, 865-874.
- ・常田美德(2007). 乳児期の共同注意の発達における母親の指示的役割. 発達心理学研究, 18, 2, 97-108.